

鷗外の漢詩文

—特に初期漢詩文の制作年月について—

芳野悦子

まえがき

木下李太郎は、その著「森鷗外」^(注1)で森鷗外は謂はばテエベス百門の大都である。東門を入っても西門を窮め難く、百家おのおの一両門を視て、他の九十八九門を遺し去るのである。

と言っている。まさしく、医学・小説・随筆・詩歌・戯曲・評論・審美学など、数えあげればきりがない程多方面に活躍している鷗外は、木下李太郎のたとえの如く、一つの門をくぐることさえ私には容易でないように思われる。しかし、ここで私はその百門のうちから、漢詩・漢文学の門を選んで入ろうと試みる。鷗外の著作を読んでいると、何か漢学の臭いのようなものが感じられるからである。また、李太郎が同著に

其他、鷗外の漢文学・漢詩・(略)等解説を要するものが頗る多い。(略)皆、余の能はざるものである。

としているのを始め、丸田潤三郎の右の言をうけて^(注2)

況して僕のやうな駈出し者の到底能くする所ではない。

と言っているように、諸家まだ漢学の門を深く奥まで入った人がい

ないように思われるからでもある。

しかし、このように、大先輩も入っていない門を一介の学生である私が短期間のうちに窮め尽くせるはずがないというのも本音である。だが、出来得る範囲内で、その門の姿なりとも見たいと思ひ、この論を進めていくこととした。

しかるに、今回、この稿では、制限二、三十枚ということ、鷗外の全生涯を通じての漢詩・漢文を展望することは難く、特に鷗外が軍医として日清、日露の両戦争に従軍して創作活動を一時中断した明治二十七年頃までの作品を中心にして論じてみたいと思ふ。そして、それも特に制作月の問題にしぼってここでは述べたい。

第一章 初期漢詩の制作について

「鷗外全集」には、次の順序で初期の漢詩が掲載されている。

辛巳十月十二日作(明治十四年十月)

待春

「航西日記」抄

「独逸日記」抄

「還東日乗」抄

答今井武夫君(明治二十二年八月「東京医事新論」)

読第三駁議。寄今井武夫君。「用鷗外漁史韻。

(明治二十二年十月「東京医事新論」)

未会醒

百尺松(以上二首明治二十三年二月「柵草紙」第五号)

目黒比翼塚(明治二十三年春)

詩以代東復溪子(舊藁)(明治二十四年二月「石見郷友会雜誌」

第一号)

刀圭余事(明治二十四年五月「衛生療病志」第十七号)

庚辰歲旦醉歌

訪応渠先生干住居

呈応渠先生

書感

茶碗

辛巳春臥病偶友人某見訪賦似

解剖

送友人之徳国

訪応渠先生居偶作

これは主に発表年月により並べられている。ところが「詩以代東復松溪子」が(舊藁)とあるのを始め、「航海日記」抄「冒頭の詩、「明治十四年叨辱学士。賦詩曰」や、「刀圭余事」中の「庚辰歲旦醉歌」「辛巳春臥病……」も、題目の中に示されている年によって、明らかに発表年月と制作年月との間に何年かの隔たりがあることがわかる。それでは他の作品においてはどうかと、一々検討してみた結果、「刀圭余事」九首と「詩以代東復松溪子」留学以後に発表されているが、制作は留学以前と思われる。以下、この事についてもう少し詳しく述べてみようと思う。

まず、「刀圭余事」九首についてみると、一首目「庚辰歲旦醉歌」は、庚辰すなわち明治十三年の元旦に鷗外が過去を顧み漠とした前途の不安を歌ったものであり、六首目「辛巳春臥病……」に辛巳すなわち明治十四年の春に卒業試験を前に肋膜炎を患った時の誌である。また八首目「送友人之徳国」はおそらく鷗外の同期生で大学を一番で卒業した三浦守治が文部省から派遣される留学生としてドイツに発った時であろう。明治十五年のことである。

以上、制作年月のほど確定的であろうと思われる三首の外に、佐藤應渠に関する詩が二首目・三首目・九首目にある。鷗外が佐藤應渠に詩を学んでいたことは、鷗外自身が「徳富蘇峰氏に答ふる書」に

明治の初年に依田学海先生に漢文を学び、佐藤應渠先生に詩を学
びし他には(略)

とあるのによってわかる。しかし、その時期については「明治の初年」とあるだけではっきりしない。それを神田孝夫氏は「若き鷗外と漢詩文・上」で明治十二、三年からとしておられる。このことは伊藤孫一との関係からもでてくるが、おそらく神田氏はこの「刀圭余事」中の三首からそのように判断されたのではなからうか。というのは、二首目「訪応渠先生干住居」は、医学を学んでいる自分ではあるが、漢詩を学びに応渠先生のもとへ通うことを許されたことを喜ぶ意の詩であり、三首目「呈応渠先生」は、以前応渠先生のすばらしい詩を読み、今その先生に直接接することができて、いつか必ず良い詩を作り先生を負かすほどになりたいという意の詩で、いずれも応渠に詩を学び始めたばかりの頃の作とわかり、それはこの「刀圭余事」が年代順に並べられていると仮定すれば、この二首目を

はさんでいる一首目と六首目がそれぞれ前に述べたように明治十三年元旦と明治十四年春の作であるから当然この間の作となるからである。この頃応渠に詩を学び始めて幾許もたためのであるから、学び始めたのは明治十二、三年ということになる。

ところで「刀圭余事」が時代順に配列されているという仮定は、ほぼ制作月の確定している前の三首には当てはまる。またこの応渠に関する二首も、やはり神田氏も言われるように、^(注4) 応渠に学び始めたのは孫一と別れた後の明治十二、三年と考えた方が自然であるから、明治十三、四年の作と考えてよいのではなからうか。そうすると「刀圭余事」九首中五首が時代順に並んでいることはほゞまちがいないことになる。

そこで応渠に関する残る一首、九首目の「訪応渠先生居偶作」について検討を進める。これは応渠宅で何か催しがあったのだろう。そこに行つた鷗外が一人離れて夢想にふけり、^(注5) 応渠のことに思いを馳せるのであるが、それは鷗外への永遠の憧憬ともいえるものが早くも窮われるような、厚みのある、^(注6) 応渠に学んで数年後とも思われる佳品となっている。鷗外が応渠に学んだのは明治十五年頃までであるから、八首目「送友人之徳国」が明治十五年の作であり、その次に位置する詩として内容とも一致するのである。^(注7)

以上六首の四首目の外に四首目「書感」、五首目「茶碗」、七首目「解剖」がある。

四首目「書感」、五首目「茶碗」は多分同時かあるいはあまり時を経ないで書かれたものと思われる。というのは「書感」の四句目「欽仰当年独嘯庵」から次の「茶碗」にある自注「好生緒言云。独嘯庵碎井戸茶碗……」を連想し「茶碗」という作品が出てきたと思

われるからである。が、それはともかくとして、制作年月をはっきり決める決めてが何もない。ただ「書感」が、医家の中でまだ一人としてすぐれた人に出合ったことのないのを嘆き、独り静かに庵にいて詩を吟んでいるのをうらやみ仰ぐ意で、それが千住に隠居して悠々自適の生活をしている応渠のことを指しているのであれば、やはり応渠のもとに通いだして間もない明治十三年頃と考えられるのではないだろうか。

また七首目「解剖」は、「府藏常位曾暗記」の句より、内臓の位置などずっと前に暗記している時期、すなわち医学の学問も相当進んだ大学後半以後であることがわかる。そして最後の句「欲取解剖翼刀圭」から、これから先に意欲をわかす時期、すなわち明治十四年夏の大学卒業直前の作ではないかと考えられる。

以上検討してきたように「刀圭余事」九首は制年月もほゞ明らかになり、時代順に並べられているという仮定もほゞ成立すると思うのであるがいかがであらうか。

次に「詩以代東復松溪子」は神田孝夫氏の前掲論文で明治十三年夏と推測されたのに従いたいと思ふ。^(注8)

また「待春」については「鷗外全集」24巻後記に森於菟氏が

書は佐藤応渠翁の手らしいが詩の下に鷗外漁史と署してあるので、詩は父の作と認められる。千住時代の青年期の作であろう。といつておられる。この詩の内容は、ある冬の日南の縁で一人沈んで冬の景色を眺めていると、ふつと風が吹き、その風の暖かさに春を待つという心を詠じたものである。師である応渠が手づから筆をとって書いただけに、静かで良い作品で、これも応渠のもとに通い始めて相当経つた、それも内容から学生時代の作とは思えぬから、

明治十五年初春の作と推定する。

以上述べてきた作品の外は「鷗外全集」所載の制作年月、発表年月によりそれぞれ見ていってよいと思われる。それで簡単に制作年月順に並べ直してみると次の通りである。

「刀圭余事」一首目 (明13・1)

詩以代東復松溪子 (明13・夏)

「刀圭余事」二首目～七首目

明治十四年叨辱学士称。賦詩曰(「航西日記」抄) (明14・夏)

辛巳十月十二日作 (明14・10)

待春 (明15・初春)

「刀圭余事」八首目～九首目 (明15)

「航西日記」抄

「独逸日記」抄

「還東日乗」抄

答今井武夫君 (明22・8)

読第三駁議・寄今井武夫君。用鷗外漁史韻 (明22・10)

未曾醒 (明23・2)

百尺松 (明23・2)

目黒比翼塚 (明23・春)

第二章 初期漢文の制作年月について

初期の漢文二十二篇についても、漢詩と同様発表年月と制作年月との間に大きな違いがあると思われるので、内容を検討して制作年月を明らかにしたい。「鷗外全集」24巻には次の順序で載っている。

後光明天皇論(明治二十四年三月「国民之友」第百十三号)

「童蒙入学門」識語

雜誌書入(明治十一年十一月)

雜説(明治二十三年三月「柵草紙」第六号)

虚空無一左衛門

瓢噓

伏見氏女

長門良医

柳淇園言

農夫

曲籍癖

衛生偶記二則(明治二十三年六月「衛生新誌」第二十三号)

体操

種痘

今之漢医其術之忠臣論(明治二十三年六月「医事新論」第七号)

反省記(明治二十三年八月「医事新論」第九号)

其一

其二

西史漫鈔(明治二十四年三月「柵草紙」第十八号)

瑣格刺底在獄

門の九

沙侖它士

学友月旦

説古鶴所伝

書池好夫與石黒軍医監薦予書後(明治二十四年四月「衛生療病志」第十六号)

小金井觀桜記(明治二十四年四月「柵草紙」第十九号)

以上のうちで制作年月の比較的明らかなものは「後光明天皇論」
「『董蒙入学門』識語」、「雑誌書入」、「小金井観桜記」である。

「後光明天皇論」は、明治二十四年三月「国民之友」に載せられた時、まきがきに鵬外自らが、

左の一節は明治六、七年の頃作りしものにて（略）

と書いているように、明治六、七年、第一大学区医学部予科入学前に後に作られたものと思われる。が續いてまきがきに

当時これを依田学海先生に寄せて教を乞ひしに（略）

とあるのはいかがであるか。第一章漢詩の所で、応渠に詩を学び始めたのは明治十二、三年と推定した。又「徳富蘇峰氏に答ふる書」により、応渠に漢詩を学び始めたのと学海に漢文を学び始めたのはほぼ同時だと思われる。そうするとこのまきがきの記述は信用できないものとなり、「明治六、七年」とあるのも実際はもう少し後だったかもしれない。

「『董蒙入学門』識語」に明治二年、すなわち、まだ故郷津和野で藩校養老館に四書の復読に通い始めたばかりの八歳の時書いた「八歳森五木童記」の七字を明治十年にみつけたで付記したものであることがその文中よりわかる。

「雑誌書入」は「鵬外全集」に（明治十一年十一月）と制作年月を記してある。^(注)

「小金井観桜記」は、明治十二年四月十二日から十三日にかけて、緒方収二郎、賀古鶴所と共に、小金井に桜を観に行った時の文である。十三日、家に帰って話をしていくと、

言未畢。覚異香拂々襲人。探懐得花片。

まだ桜の香が着物に残っていて、さきほどまでの興奮がまだ、
為之記。以志年月。

より、明治十二年四月十三日のうちに書かれたか、少くとも二、三日中には書かれたものであらうと思われる。

次に、内容により制作年月がやゝはっきりするものとして「衛生偶記二則」、「反省記」二篇、「学反月旦」、「賀古鶴所伝」、

「書池好夫與石黒軍医監薦予書後」がある。

まず、「衛生偶記二則」の「体操」は、体操の効果を述べたもので、

我医醫夙設体操場

ではじまり

今也我費。大興學術。又有此舉。眞是千載嘉會。百世良遇也。余輩精勵奮發。

と述べているように、東大医学部在学中の作と思われる。

また、同じく「衛生偶記二則」の「種痘」は、ある人に種痘について問われ、鵬外がそれに答えるという形式の文であるが、この文中には制作年月をあらわす語がない。それではっきりしたことは言えないが、ジェンナーの牛痘種痘法は嘉永二年、すでに日本に入ってきており、また「衛生偶記二則」として「体操」とまとめて掲載されているなどことから、これも医学の学問途上である大学在学時の制作と考えられる。

「反省記」に篇は、「其二」の後に

反省記二篇。今而読之。滿肚客氣。見乎筆墨之間。唯覚面目可憎。

とあるように、明らかに発表された明治二十三年八月より大部以前

の作品であることがわかる。それでは、はっきりした年月はいつであるかと考えるに、「其一」は、

宗審読日耳曼某氏外科書。愛其説之精且詳也。以為訳而行之。必有益於世矣。仍起稿于明治十年夏。至十二年春。第一巻終業。に始まり、池田謙齋先生に翻訳した一巻の校閲を乞うたところ、ひどくしかられて

余遂絶翻訳之業。

と終る。やはりこの事件のあった明治十二年春頃の作と思われる。

又、「其二」は、大学を卒業した明治十四年七月九日、旧藩士清水某家に行き、そこで始めて待医渡邊公に逢った時のことを記したもので、文の終りの方に

余成志之日。得再見公。而語及今日。則公之喜其奚若也。

とある。すなわち「余成志之日」の後にこの文を書いたのであろうが、それは一体いつのことであろうか。私は明治十四年十二月陸軍軍医副に任命された時であろうと思う。^(金10)

「学友月旦」は鷗外の大学の同級生数人の私評を述べたものである。

比舍同窓之士三十人。予周旋其間。有年於比。自謂能悉其為人。乃私評之。

明治十四年の東大医学部卒業生は、留年組も併せて総数二十八名であった。この数は卒業試験の後でないと思われる。また文中批評された者の記事が、やはり大学時代の観察によって書かれたと思われる事などから、大学卒業直前の作ではないかと考えられる。

また、次の「賀古鶴所伝」も「学友月旦」と同種のものである。否、「学友月旦」よりもっとはっきりしている。すなわち、

往年陸軍省募医干我校十数人。鶴所為其一。吾知鶴所他日為医官。臨戰場。提利器。

より、鶴所がまだ陸軍の軍医となっていない時期、そして鷗外自身も陸軍の軍医となろうとは夢にも思っていない時である。大学卒業以前の作であろう。

次に「書池好夫與石黒軍医監薦予書後」は、小池正直が鷗外の希望していた文部省からの留学を到底無理だと予測して、「与石黒軍医監薦森氏書」という長い漢文の推薦状を書いて石黒軍医監のもとへ出したが、その後その推薦状を見て書いたものと思われる。

予性本迂僻而抗直。落落靡有所合。誤辱好夫之賞識。其推重褒譽。甚於文學之言。而予無正平之實是可媿也。雖然夷而察之。亦喜不止者。何也。予固未有求於石黒氏。

右の文より、まだ陸軍行きをはっきり決めていない明治十四年七月から十二月までの作と思われる。

以上、制作年月のおよそわかるものについて述べてきたが、最後に、文中にほとんど制作年月を示す語のない「雑誌」七篇、「西史漫鈔」三篇、「今之漢医其術之忠臣論」について考察し、少しでも明らかにしてみたい。

「雑説」七篇は小話集ともいえるべきものである。「虚空無一左衛門」は緒田信長の頃の虚空無一左衛門という男の話、「瓢箪」は梅村善鏡という酒呑みの男の話、「伏見氏女」は柳田恭という人が有馬温泉に行つてそこで聞いた話、「長門良医」は鷗外の祖母の祖父木嶋節操宅に寄食していた長門の医者、吉賀栄庵の話、「柳棋園言」は素手で鯉をとる人の秘訣を柳棋園が聞き、自分で感想を述べたことについて、「農夫言」はある農夫が畑で鬮を捨て、そのこ

とについて農夫が何か言った話である。ただ一つ、「典籍癖」が多少以上六篇とは趣を異にした内容を持っている。が「雑説」七篇が掲載された同じ「冊草紙に約半年後の明治二十四年三月に発表された「西史漫鈔」三篇は、「典籍癖」を除く「雑説」六篇と話の性格がよく似ている。すなわち、「瑣格刺底左獄」は、ソクラテスが牢に入れられた時、弟子が脱獄をすすめるに來たが、法を破るわけにはいかぬと断つた話、「門的九」は、仏人モンテスキューがある休息日に乗った船の船頭父子を助けた話、「沙命它士」は、伊人サルタンヌが乱れた国のため法をつくり、その法のため自ら死んでいくという話である。つまり、先に述べた「雑説」六篇も、この「西史漫鈔」三篇も、まだ漢文修業の途上にある大学在学時の練習作が残っていて、それぞれ帰国後にまとめて発表したもののように思われる。

ただ、前にもあげた「雑説」中の最後の一篇「典籍癖」だけは大学卒業以後の作と思われるが、はっきりしたことはわからない。

最後に「今之漢医其術之忠臣論」の制作年月を明らかにしたい。がこれも文中に制作年月をあらわす語がない。ただ

嗚乎二千年來漢医学之巍々乎。今將亡焉。(略) 予求當時。僅得三子。喜多村寛也。尾臺士超也。今村祇卿也。

とある三子のうち、尾臺士超の歿した年は不明であるが、喜多村寛は明治九年十月に、今村祇卿は明治二十三年一月に、それぞれ歿している。そこで「今將亡焉」の時、「予求當時」の時とは、三子が揃って生存していた時期か、または一人、二人、あるいは三人とも歿した後のことか問題がしぼられる。すなわち、明治九年十一月以前といえ、鷗外はまだ大学の予科在学中で、漢文作品もほとんど現存していない。しかし、明治六、七年に作ったと一応考えられる

「後光明天皇論」があるからこの文がその頃書けなかつたとは断定できない。またこの作品は、明治二十三年六月に発表されているが、おそらく三人のうちで一番長生きをしていたと思われる今村祇卿が同年一月に死んでいるので、その事を聞いてこの作品を書いたとも考えられる。しかし私はこの文章の性格が前の衛生偶記「二則」に似ていることから、三人のうち一人乃至二人死んでまさに漢医学がほろびようとしている時、すなわち大学卒業前の明治十三、四年に、昔をふり返って書いた文ではなかるうかと思う。

以上で前期の漢文の制作年月はほぼ明らかになり、明治二十三年、四年に発表された漢文作品も、ほとんど皆明治十三、四年、大学卒業時頃までに作られていたであろうことが推定される。簡単に以上の制作年月順に並べかえてみると次のようである。

後光明天皇論

「童蒙入学門」識語

雑誌書入

小金井観桜記

反省記其一

「雑説」六篇

「衛生偶記」二則

今之漢医其術之忠臣論

「西史漫鈔」三篇

学友月旦

賀古鶴所伝

書池好夫與石黒軍医監薦予書後

反省記其二

(明6)7)

(明10)

(明11)・11)

(明12)・4)

(明12)・春)

(明13)・14)

(明13)・14)

(明13)・14)

(明13)・14)

(明14)

(明13)・14)

(明14)・7)・14)・12)

(同右)

あとがき

以上、鷗外の初期の漢詩文、特にその制作年月について述べてきて、それらがほとんど明治十三、四年の大学後半期をピークとして書かれていることが明らかになった。そして本稿で私がいいたいのは、鷗外の漢詩文を考える時、その制作年月を明らかにして行く、初期の漢詩文はほとんどが鷗外の文壇における処女作とされる「舞姫」制作以前のもとなり、「舞姫」以後の文学活動の母胎ともなる文学修業として注目していいのではないかとということである。つまり、神田孝夫氏が前掲論文にいうところの『文学開眼』の時期の作品として、この初期の漢詩文を再評価すべきではないかと思うのである。事実、この期の作品は、後期の作品が熟達した、破綻のないものであるが、淡々として、いわば心が滞しく動かされるというものが少ない、静かな作品が多いのに反し、いかにも青年らしい情熱あふれる作品が多いのに気づく。即ち、このころの鷗外が、いかに漢詩文に熱を入れ、はりきって多くの作品を作っていたかが想像されるのである。そしてそのころ漢文学にそそいでいた彼の文学への情熱が、帰国後小説へ、あるいは翻訳へと進んでいったのではないかと思われる。現にそれらの方面の文学活動が始まると、しばらくは漢詩文を作らなくなっていることにもその一端が窺えるのではないだろうか。

最後にこの小稿で私なりになんとかこれだけの展望ができて、もちろんまだまだ多くの問題点が残っている。初期の問題点も解決されてしまったとはまだ言えないし、また後期にはもっと多くの問題

点が残されているように私には思える。しかし今は紙面の関係上これだけにとどめ、他はすべて後日に譲ることとする。

注1 岩波講座・日本文学

注2 「鷗外先生と支那学」（「書物展望」七・昭11）

注3 神田孝夫氏の「若き鷗外と漢詩文・上」には、鷗外の大学予科二年時、すなわち明治八年の夏からの同郷の友伊藤孫一との交友を重んじ、孫一によって始めて漢詩文の世界へ導びかれたとしておられる。そしてその孫一との交友関係は、孫一家家庭の事情で故郷に帰る明治十二年夏で一応終るから、応葉に漢詩を学び始めたのはその後の明治十二、三年と考えられる。

注4 注3参照

注5 応葉に詩を学んでいたのはいつまでかと考えるに、「大人名事典」（平凡社昭28）で調べてみると、

明治維新後、東京千住に隠居し、十五年茨城県下妻温知病院長に招せられ、のち千葉県野田に移った。

とあり、応葉に漢詩を学んだのも明治十五年頃までと思われる。

注6 詩の中に菊の畑の中を歩く描写があるので秋の詩である。応葉が十五年の何月まで千住にいたかが不明であるので少しはつきりせぬが、三浦守治が留学に発ったのはおそらく十五年の春から夏にかけてであろうから、十五年の秋とすれば時代順に並べられていることになる。内容から学生時代の作とは思われにくい。十四年の秋とも考えられないこともな

いが、今は十五年の秋と考えたい。

注7 「若き鵬外と漢詩文・上」(比較文学研究「第十三号」)に神田氏は「詩以代東復松溪子」の内容により明治十三年夏と推測された。すなわち、この詩の内容が松溪子こと伊藤孫一近況を伝えたものであり、その中で二師こと学海・応渠のことを知らせているからである。孫一と別れたのは明治十二年夏、学海が向島にいたのが十四年六月まで、それにこの詩の内容が夏の詩であることから十三年夏の作とされた。

注8 鵬外の父が千住に家を持ったのは明治十二年六月からであるが、その頃鵬外は官費生として本郷本富士町医学校寄宿舎におり、途中明治十三年に本郷竜岡町の下宿屋上条に移り、十四年七月卒業するまでそこにいたようであるから、千住時代とは卒業後留学するまでの約二年間を指すものと思われる。ところで鵬外が応渠に詩を学んでいたのは明治十五年までと思われるので、千住時代で応渠に詩を学んでいた初春ということからも明治十五年初春作と推定される。

注9 明治十一年十一月といえ、東大医学部本科生となつて一年半程たつており、すでに漢詩文に興味をもち始め修業している頃であるから、「雑誌書入」中の「湖海詩文」、「京華新誌」、「近世詩文集」などの漢詩文関係の雑誌を読んでいたことは充分考えられることである。

注10 「反省記」が発表された明治二十三年八月以前で、鵬外が「余成志之日」と言い得る日は三度ある。すなわち、明治十四年十二月の陸軍軍医副として任命された時と、明治十七年六月の留学を命ぜられた時、それに明治二十一年九月の帰国

の日である。しかし文中、はじめて猿渡公にあつた時、公等にいろいろ言われて後、

公之意。蓋在激励余而已。今公者朝廷顯官。余者布衣少年。以彼罵此。

などと言っていることから、ただ若くして学士となつた時よりむしろ陸軍省に職も決まり、始めて実際に行動をおこすようになった後、すなわち明治十四年十二月以後と考へるのである。ドイツ留学の件はこの際関係ないのではなからうか。

注11 「典籍癖」の中で

一日有客展書水閣。誤墜干池中。

とあるのだが、この水閣のある家がどこの家であるかがわからない。大学卒業までは寄宿舎や下宿住まいで家にいないのでこの文章は書けない。大学卒業から明治二十三年一月までは千住の父の家に同居しているが、長谷川泉氏の「鵬外の詩と真実・5」、「同7」(「解釈と鑑賞」5月号・7月号)に載っている千住の家の間取り図には池も水閣らしきものもない。二丁三年一月に下谷金杉に移っているが、この家の間取り図は不明であるのでわからない。

注12 神田考夫氏「若き鵬外と漢詩文・上」